

金勝雅裕智 編曲集

～日本の調べ No.2～

金勝裕子（著）（2012年12月，大日本家庭音楽会）

公益財団法人正派邦楽会 大師範 井上雅楽美恵

箏曲編曲集として出版に至ったこの楽譜は、箏および尺八の合奏曲集として編曲した曲集である。本来箏・尺八・三弦（または胡弓）の「三曲合奏」としては、古曲と呼ばれる江戸時代に発達した箏曲として今日まで受け継がれてきているが、古典としての格式・形式・演奏方法などそれぞれの流派や家元によって多少の違いがあるにしても脈々として受け継がれている古典の形態で合奏がなされてきた。その後時代とともに新古曲や近代邦楽そして現代邦楽と箏曲を含む三曲合奏の世界は、時代とともにいろいろな曲が作曲家たちによって新しい音楽として邦楽に位置づけられている。

このような中において金勝氏の為された音楽はこれまでの箏曲とは違い、身近な聞きなれた音楽で箏曲合奏を楽しむという、異なった立場での作曲において出版に至ったものである。それゆえ氏は民謡を取り上げ「作曲集」とは書かず「編曲集」として出版をしている。

第1曲目「おてもやん」は明るくたいへんひょうきんな曲として親しまれている熊本民謡である。言葉も熊本の方言が入り「～したばってん」とか「いわれんたい」などと言う言い回しが歯切れよく歌詞に入ってくる。もともと速い曲であるので、テクニク的には易しくないと言えるが、氏の編曲のクライマックスにおける転調が4小節ごとに行われ、4度転調して元に戻るという技術的にも中級者以上のテクニクを要求されるあたりはたいへん面白く弾きごたえのある作品となっている。

第2曲目「ソーラン節」もたいへん親しまれている北海道民謡である。この曲は速さよりも海の男が力強く漁をしている様子を音楽で出したいという意味では掛け声が入る「あー、どっこいしょ、どっこいしょ」などは男の人のメンバーの声などで演出すると楽しく演奏に持っていける曲である。テクニク的には初心者でもテンポによってはこなせる曲に仕上がっている。

さて実際の演奏会でこの2曲の演奏を試みた。コンサートの成功に観客の動員は欠かせないことはもちろんの条件である。従来の古曲の演奏では、古曲においては邦楽独特の歌いまわしや「あたり」と言われる歌い方を行うものであるが、観客は曲に精通していると楽しむことができるという難しさがある。邦楽に慣れ親しんでいる観客にはたいへん音楽の良さがわかってもらえるのであるという観客動員が困難なことは否めない。しかしこの編曲では従来のそういった歌い方ではなく、日本人の耳に親しまれている民謡の歌い方で民謡の歌い手を起用し、民謡として歌の魅力や味を出し、観客と共に舞台をたいへん楽しむことができたということが、演奏会成功につながったということが言える。そういう意味では、箏曲界の在り方に異変を起こした編曲と言える作品になった。

今後、尺八・民謡の歌い手をまじえて聴衆に楽しんでもらえる演奏を提供するという立場に立っての演奏会に期待できる編曲本となるものである。